

『朱子語類』 卷二六～卷二九 訳注 (二二)

二松学舎大学宋明資料輪読会里仁篇班

中根 公雄

序言

本稿は、『陽明学』第三十二号（二松学舎大学東アジア学術総合研究所陽明学研究センター、令和四年三月刊）に掲載の『朱子語類』巻二六～巻二九訳注（二〇）の続稿である。本訳注（二二）は巻二七里仁篇下「子曰參乎章」を検討し、報告する。訳注（二一）の巻頭に記した「序言」「凡例」は、原則として本稿においても踏襲しているので、（二一）を参照されたい。なお、割注は、小字とせずに【 】に入れた。

輪読会里仁篇班の参加者は、石原伸一（茨城高等学校・中学校教諭）、岡野康幸（群馬医療福祉大学専任講師）、小幡敏行（横浜市立大学教授）、久米晋平（秀明大学専任講師）、中根公雄（二松学舎大学非常勤講師）である。

各条の担当者は、巻二七里仁篇下「子曰參乎章」（里15・51～53）が中根公雄である。

〔里15〕子曰參乎章

子曰、參乎、吾道一以貫之。曾子曰、唯。【參、所金反。唯、上聲。○參乎者、呼曾子之名而告之。貫、通也。唯者、應之速而無疑者也。聖人之心、渾然一理、而泛應曲當、用各不同。曾子於其用處、蓋已隨事精察而力行之、但未知其體之一爾。夫子知其真積力久、將有所得。是以呼而告之。曾子果能默契其指。即應之速而無疑也。】子出。門人問曰、何謂也。曾子曰、夫子之道、忠恕而已矣。【盡己之謂忠、推己之謂恕。而已矣者、竭盡而無餘之辭也。夫子之一理渾然而泛應曲當、譬則天地之至誠無息、而萬物各得其所也。自此之外、固無餘法。而亦無待於推矣。曾子有見於此、而難言之。故借學者盡己推己之目、以著明之。欲人之易曉也。蓋至誠無息者、道之體也。萬殊之所以一本也。萬物各得其所者、道之用也。一本之所以萬殊也。以此觀之、一以貫之之實可見矣。或曰、中心爲忠、如心爲恕。於義亦通。○程子曰、以己及物仁也。推己及物恕也。違道不遠是也。忠恕一以貫之。忠者天道、恕者人道。忠者無妄、恕者所以行乎忠也。忠者體、恕者用。大本達道也。此與違道不遠異者、動以天爾。又曰、維天之命、於穆不已、忠也。乾道變化、各正性命、恕也。又曰、聖人教人、各因其才。吾道一以貫之、惟曾子爲能達此。孔子所以告之也。曾子告門人曰、夫子之道、忠恕而已矣。亦猶夫子之告曾子也。中庸所謂忠恕違道不遠、斯乃下學上達之義。】

〔里15·51／二七·五十一〕

本文

今有一種學者、愛說某自某月某日有一箇悟處後、便覺不同。及問他如何地悟、又却不说。便是曾子傳夫子一貫之道、也須可說、也須有箇來歷、因做甚麼工夫、聞甚麼說話、方能如此。今若云都不可說、只是截自甚月甚日爲始、已前都不是、已後都是、則無此理。已前也有是時、已後也有不是時。蓋人心存亡之決、只在一息之間、此心常存則皆是、此心才亡便不是。聖賢教人、亦只據眼前便著實做將去。孟子猶自說箇存心、養性。若孔子則亦不說此樣話、但云學而時習之、入則孝、出則弟、謹而信、汎愛衆而親仁、君子食無求飽、居無求安、敏於事、慎於言、就有道而正焉。顏淵問仁、則曰、非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動。仲弓問仁、則曰、出門如見大賓、使民如承大祭。己所不欲、勿施於人。司馬牛問仁、則曰、仁者其言也訥。據此一語、是司馬牛己分上欠闕底。若使他從此著實做將去、做得徹時、亦自到他顏冉地位。但學者初做時、固不能無間斷。做來做去、做到徹處、自然純熟、自然光明。如人喫飯相似、今日也恁地喫、明日也恁地喫。一刻便有一刻工夫、一時便有一時工夫、一日便有一日工夫。豈有截自某日爲始、前段都不是、後段都是底道理。又如曾子未聞一貫之說時、亦豈全無是處。他也須知得爲人臣、止於敬、爲人子、止於孝、爲人父、止於慈、與國人文、止於信。如何是敬、如何是孝、如何是慈、如何是信、件件都實理會得了、然後件件實做將去。零零碎碎、煞著了工夫、也細摸得箇影了、只是爭些小在。及聞一貫之說、他便於言下將那實心來承當得、體認得平日許多工夫、許多樣事、千頭萬緒、皆是此箇實心做將出來。却如人有一屋錢散放在地上、當下將一條索子都穿貫了。而今人元無一文錢、却也要學他去穿、這下穿一穿、又穿不著、那下穿一穿、又穿不著、似恁爲學、成得箇甚麼邊事。如今誰不解說一以貫之。但不及曾子者、蓋曾子是箇實底一以貫之、如今人說者、只是箇虛底一以貫之耳。誠者物之終始、不誠無物。孔子曰、言忠信、行篤敬、雖蠻貊之邦行矣。言不忠信、行不篤敬、雖州里行乎哉。立則見其參於前也、在輿則見其倚於衡也、夫然後行。只此是學、只爭箇做得徹與不徹耳。孟子曰、服堯之服、誦堯之言、行堯之行、是堯而已矣。服桀之服、誦桀之言、行桀之行、是桀而已矣。【廣】

校勘

- (1) 做甚麼工夫、聞甚麼說話——「做甚麼工夫、聞甚麼說話」は、楠本本は「做甚麼說話」に作る。
- (2) 著——「著」は、正中書局本・和刻本・楠本本は「着」に作る。
- (3) 弟——「弟」は、楠本本は「悌」に作る。
- (4) 汎——「汎」は、正中書局本・朝鮮整版本・和刻本・楠本本は「泛」に作る。
- (5) 愼——「愼」は、正中書局本・朝鮮整版本・和刻本・楠本本は「謹」に作る。
- (6) 著——「著」は、正中書局本・和刻本・楠本本は「着」に作る。
- (7) 煞——「煞」は、楠本本は「噉」に作る。
- (8) 著——「著」は、正中書局本・和刻本・楠本本は「着」に作る。
- (9) 細——「細」は、楠本本は「約」に作る。
- (10) 却——「却」は、正中書局本・朝鮮整版本・和刻本・楠本本は「恰」に作る。
- (11) 著——「著」は、正中書局本・和刻本・楠本本は「着」に作る。
- (12) 著——「著」は、正中書局本・和刻本・楠本本は「着」に作る。

訓読

今一種の學者有り、某（それがし）は某月某日に一箇の悟る處有るより後、便ち同じからざるを覺ゆと愛く説く。他に如何地（いかん）して悟るかを問ふに及ぶも、又却て説かず。便（た）は曾子夫子一貫の道を傳ふるも、也（ま）た須（かなら）ず説くべく、也（ま）た須（かなら）ず箇の來歴有りて、因りて甚麼（なん）の工夫をか做し、甚麼の說話をか聞きて、方（は）めて能く此の如し。今若し都（す）て説くべからずと云はば、只是（た）た甚月甚日より截（た）ちて始めと爲し、已前は都（す）て是ならず、已後は都（す）て是とせば、則ち此の理無し。已前も也（ま）た是なる

時有り、已後も也た是ならざる時有り。蓋し人心存亡の決は、只だ一息の間に在るのみにして、此の心常に存すれば則ち皆是なり、此の心才かに亡ければ便ち是ならず。聖賢の人を教ふるも、亦た只だ眼前に據りて便ち著實に做し將ち去く。孟子は猶なほ自みづか箇の心を存し、性を養ふと説く。⁽¹⁾孔子の若きは則ち亦た此の様の話を説かず、但だ「學びて時に之を習ふ」、⁽²⁾「入りては則ち孝、出でては則ち弟、謹みて信、汎く衆を愛して仁に親しむ」、⁽³⁾「君子は食飽くことを求むる無く、居安きを求むる無く、事に敏にして、言に慎み、有道に就きて正す」と云ふのみ。顔淵仁を問へば、則ち曰はく、「禮に非ざれば視ること勿れ、禮に非ざれば聽くこと勿れ、禮に非ざれば言ふこと勿れ、禮に非ざれば動くこと勿れ」と。⁽⁴⁾仲弓仁を問へば、則ち曰はく、「門を出でては大賓を見るが如くし、民を使ふには大祭を承くるが如くす。己の欲せざる所は、人に施すこと勿れ」と。⁽⁵⁾司馬牛仁を問へば、則ち曰はく、「仁者は其の言や訥なり」と。⁽⁶⁾此の一語に據れば、是れ司馬牛の己が分上の欠闕の底なり。⁽⁸⁾若使し他此に従ひて著實に做し將ち去き、做し得て徹る時は、亦た自から他の顔冉の地位に到らん。⁽⁹⁾但だ學者初めて做す時は、固より間斷無き能はず。做し來り做し去き、做し到りて徹る處は、自然にして純熟し、自然にして光明なり。人の飯を喫ふが如く相ひ似たり、今日も也た恁地に喫ひ、明日も也た恁地に喫ふ。一刻には便ち一刻の工夫有り、一時には便ち一時の工夫有り、一日には便ち一日の工夫有り。豈に某日より截ちて始めと爲し、前段は都て是ならず、後段は都て是なる底道理有らんや。又曾子未だ一貫の説を聞かざる時の如きも、亦た豈に全く是なる處無からんや。他も也た須ず「人の臣と爲りては、敬に止まり、人の子と爲りては、孝に止まり、人の父と爲りては、慈に止まり、國人と交はりては、信に止まる」⁽¹⁰⁾は、如何にせば是れ敬なるか、如何にせば是れ孝なるか、如何にせば是れ慈なるか、如何にせば是れ信なるかを知得し、件件都て實に理會し得て了はりて、然る後に件件實に做し將ち去く。零零碎碎、⁽¹¹⁾然はなはだ工夫を著け了はり、也た細かに箇の影を摸し得て了はれば、只是た些小を争ふ。一貫の説を聞くに及びて、他便

ち言下に於て那の實心を將ち來りて承當し得て、平日の許多の工夫、許多の様事を體認し得て、千頭萬緒、皆是此の箇の實心の做し將ち出し來る。却て人に一屋の錢有りて散放して地上に在り、當下に一條の索子を將て都て穿貫し了はるが如し。而今人元より一文の錢無く、却て也た他を學び去きて穿たんことを要め、這下に二穿を穿つも、又穿ち著けず、那下に一穿を穿つも、又穿ち著けず、恁の似く學を爲すは、箇の甚麼邊の事をか成し得ん。如今誰か「一以て之を貫く」と説くを解せざらん。但だ曾子に及ばざる者は、蓋し曾子は是れ箇の實底①。「一以て之を貫く」なるも、如今の人の説く者は、只是だ箇の虛底②。「一以て之を貫く」のみ。「誠は物の終始、誠ならざれば物無し」と。孔子曰はく、「言は忠信、行は篤敬なれば、蠻貊の邦と雖も行はれん。言は忠信ならず、行は篤敬ならざれば、州里と雖も行はれんや。立てば則ち其の前に參ずるを見るなり、輿に在れば則ち其の衡に倚るを見るなり、夫れ然る後に行はれん」と。只だ此是の學は、只だ箇の做し得て徹ると徹らざるとを争ふのみ。孟子曰はく、「堯の服を服し、堯の言を誦し、堯の行ひを行はば、是れ堯のみ。桀の服を服し、桀の言を誦し、桀の行ひを行はば、是れ桀のみ」と。③【輔廣④】

口語訳

いまある種の学ぶ者は、私は某月某日に悟つてから、(悟る前と)違つていると感じると言いたがる。ところがその人にどのように悟つたかと質問すると、何も話さない。たとえ曾子が夫子一貫の道を伝えたとして、必ず説明でき、きつといきさつもあるはずで、それにより何らかの工夫をし、何らかの話を聞いて、初めてそのように出来る。今もし全く説明できないというなら、何月何日を以て始めとして、それ以前は全く正しくなく、それ以後は全て正しいとするならば、そんな道理はない。以前にも正しい時があり、以後にも正しくない時がある。思うに人の心の存亡は、わずかな間に存する

のであって、この心が常にあれば全て正しく、この心が無くなると正しくない。聖賢が人を教えるには、ただ眼前のことに基づいて着実に行う。孟子はなお心を存し、性を養うと説く。孔子の場合はこの種の話を説かず、ただ「学びて時に之を習ふ」、「入りては則ち孝、出でては則ち弟、謹みて信、汎く衆を愛して仁に親しむ」、「君子は食飽くことを求むる無く、居安きを求むる無く、事に敏にして、言に慎み、有道に就きて正す」と言うのみである。顔淵が仁を問うと、「礼に非ざれば視ること勿れ、礼に非ざれば聴くこと勿れ、礼に非ざれば言ふこと勿れ、礼に非ざれば動くこと勿れ」と。仲弓が仁を問うと、「門を出でては大賓を見るが如くし、民を使ふには大祭を承くるが如くす。己の欲せざる所は、人に施すこと勿れ」と。司馬牛が仁を問うと、「仁者は其の言や訥なり」と。この言葉に拠れば、それが司馬牛自身に欠けていたものである。もし彼がこの語に従って着実に行っていき、そうして徹底した時は、自然にあの顔淵や冉伯牛の境地になるだろう。ただ学ぶ者が始めた当初は、確かにどうしても間断が生じてしまう。繰り返して行つて、そうして徹底した時には、自然に熟達し、自然に公明正大になる。ちょうど人が食事をするようなもので、今日もこうして食べ、明日もそうして食べる。一刻には一刻の工夫があり、一時には一時の工夫があり、一日には一日の工夫がある。どうして某日より始めとして、以前は全く正しくなく、以後は全て正しいとする道理が有るだろうか、そんなことは無い。さらに曾子がまだ一貫の説を聞かなかつた時も、どうして全く正しいところが無かつただろうか。彼も必ず「人の臣と為りては、敬に止まり、人の子と為りては、孝に止まり、人の父と為りては、慈に止まり、国人と交はりては、信に止まる」と、どうすれば敬であるか、どうすれば孝であるか、どうすれば慈であるか、どうすれば信であるかを知り、一つ一つ全て着実に分かつて、はじめて一つ一つ着実に行つていく。こまごまと大いに工夫をして、また仔細に探つたならば、もう少しのところとなる。一貫の説を聞くに至つて、彼は一言の下にあの誠実な心で応じることができ、不断の数多の工夫、数多の事柄を理解することが

できて、複雑な事も、みなこの誠実な心で行ってきた。たとえば人に部屋中いっぱいのお金がバラバラに下にあつて、直ちに一本の紐で全て貫き通すようなものである。今、もともと一文の銭も無いのに、曾子をまねて穿とうとし、こつちで穿とうとしても、穿てず、あつちで穿とうとしても、穿てず、そうやって学問をしても、何を成し遂げられようか。今や誰でも「一以て之を貫く」を解説する。しかし曾子に及ばない者、思うに曾子は着実な「一以て之を貫く」であるが、今の人が説くのは、ただ空虚な「一以て之を貫く」に過ぎない。「誠は物の終始、誠ならざれば物無し」と。孔子曰はく、「言は忠信、行は篤敬なれば、蠻貊の邦と雖も行はれん。言は忠信ならず、行は篤敬ならざれば、州里と雖も行はれんや。立てば則ち其の前に參するを見るなり、輿に在れば則ち其の衡に倚るを見るなり、夫れ然る後に行はれん」と。ただ学問は、徹底して行えるか徹底しないかの差に他ならない。孟子曰はく、「堯の服を服し、堯の言を誦し、堯の行ひを行はば、是れ堯のみ。桀の服を服し、桀の言を誦し、桀の行ひを行はば、是れ桀のみ」と。【輔廣録】

注

(一) 孟子は…と説く―「孟子猶自說箇存心、養性」は、『孟子』尽心上篇第一章に「孟子曰、盡其心者知其性也。知其性則知天矣。存其心、養其性、所以事天也。夭壽不貳、修身以俟之、所以命立也」とあり、『集注』は、心には「心者人之神明、所以具衆理而應萬事者也」、性には「性則心之所具之理」と注し、また存・養を「存、謂操而不捨。養、謂順而不害」と注する。さらに朱熹は「愚謂、盡心知性而知天、所以造其理也。存心養性以事天、所以履其事也。不知其理、固不能履其事。然徒造其理而不履其事、則亦無以有諸己矣」と注する。

(二) 學びて…を習ふ―「學而時習之」は、『論語』学而篇第一章に「子曰、學而時習之、不亦說乎。有朋自遠方來、不亦樂乎。人不知而不愠、不亦君子乎」とあり、『集注』には「學之爲言效也。人性皆善、而覺有先後。後覺者必效先覺之所爲、乃可以明善而復其初也。習、鳥數飛也。學之不已、如鳥數飛也。說、喜意也。既學而又時時習之、則所學者熟、而中心喜說、其進自不能已矣。程子曰、習、重

習也。時復思繹、浹洽於中、則說也。又曰、學者將以行之也、時習之則所學者在。故說。謝氏曰、時習者、無時而不習。坐如尸、坐時習也。立如齊、立時習也」と注する。

(3) 入りて：親しむ。「入則孝、出則弟、謹而信、汎愛衆而親仁」は、『論語』学而篇第六章に「子曰、弟子入則孝、出則弟。謹而信。汎愛衆而親仁。行有餘力則以學文」とあり、『集注』には「謹者、行之有常也。信者、言之有實也。汎、廣也。衆、謂衆人。親、近也。仁、謂仁者。餘力、猶言暇日。以、用也。文、謂詩書六藝之文。○程子曰、爲弟子之職、力有餘則學文。不修其職而先文、非爲己之學也。尹氏曰、德行本也、文藝末也。窮其本末、知所先後、可以入德矣。洪氏曰、未有餘力而學文、則文滅其實。有餘力而不學文、則質勝而野。愚謂、力行而不學文、則無以考聖賢之成法、識事理之當然、而所行或出於私意。非但失之於野而已」と注する。

(4) 君子は：て正す。「君子食無求飽、居無求安、敏於事、慎於言、就有道而正焉」は、『論語』学而篇第十四章に「子曰、君子食無求飽、居無求安、敏於事、而慎於言、就有道而正焉。可謂好學也已」とあり、『集注』には「不求安飽者、志有在而不暇及也。敏於事者、勉其所不足。慎於言者、不敢盡其所有餘也。然猶不敢自是而必就有道之人、以正其是非、則可謂好學矣。凡言道者、皆謂事物當然之理、人之所共由者也。○尹氏曰、君子之學、能是四者、可謂篤志力行者矣。然不取正於有道、未免有差。如楊墨學仁義而差者也。其流至於無父無君。謂之好學可乎」と注する。

(5) 顏淵仁：勿れ」と。「顏淵問仁、則曰、非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動」は、『論語』顏淵篇第一章に「顏淵問仁。子曰、克己復禮爲仁。一日克己復禮、天下歸仁焉。爲仁由己、而由人乎哉。顏淵曰、請問其目。子曰、非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動。顏淵曰、回雖不敏、請事斯語矣」とあり、『集注』には「目、條件也。顏淵問夫子之言、則於天理人欲之際、已判然矣。故不復有所疑問而直請其條目也。非禮者、己之私也。勿者、禁止之辭。是人心之所以爲主而勝私復禮之機也。私勝、則動容周旋無不中禮、而日用之間莫非天理之流行矣。事、如事事之事。請事斯語、顏淵默識其理、又自知其力有以勝之。故直以爲己任而不疑也。○程子曰、顏淵問克己復禮之目。子曰、非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動。四者身之用也。由乎中而應乎外。制於外、所以養其中也。顏淵事斯語、所以進於聖人。後之學聖人者、宜服膺而勿失也。因箴以自警。其視箴曰、心兮本虛、應物無迹。操之有要、視爲之則。蔽交於前、其中則遷。制之於外以安其內。克己復禮、久而誠矣。其聽箴曰、人有秉彝、本乎天性。知誘物化、遂亡其正。卓彼先覺、知止有定。閑邪存誠、非禮勿聽。其言箴曰、人心之動、因言以宣。發禁躁妄、內斯靜專。矧是樞機、興戎出好、吉凶榮辱惟其所召。傷易則誕、傷煩則支。已肆物件、出悖來違。非法不道、欽哉訓辭。其動箴曰、哲人知幾、誠之於思。志士勵行、守之於爲。順理則裕、從欲惟危。造次克念、戰兢自持。習與性成、聖賢同歸。愚按、此章問答、乃傳授心法、切要之言。非至明不能察其幾、非至健不能致其決。故惟顏子得聞之。而凡學者亦不可以不勉也。程子之箴、發明親切、學者尤宜深玩」と注する。

(6) 仲弓仁：勿れ」と。「仲弓問仁、則曰、出門如見大賓、使民如承大祭。己所不欲、勿施於人」は、『論語』顏淵篇第二章に「仲弓問仁。

子曰、出門如見大賓、使民如承大祭。己所不欲、勿施於人。在邦無怨、在家無怨。仲弓曰、雍雖不敏、請事斯語矣」とあり、『集注』には「敬以持己、恕以及物、則私意無所容而心德全矣。内外無怨、亦以其效言之、使以自考也。○程子曰、孔子言仁、只說出門如見大賓、使民如承大祭。看其氣象、便須心廣體胖、動容周旋中禮。唯謹獨便是守之之法。或問、出門使民之時、如此可也。未出門使民之時、如之何。曰、此儼若思時也。有諸中而後見於外。觀其出門使民之時、其敬如此、則前乎此者、敬可知矣。非因出門使民、然後有此敬也。愚按、克己復禮、乾道也。主敬行恕、坤道也。顏冉之學、其高下淺深、於此可見。然學者誠能從事於敬恕之間而有得焉、亦將無己之可克矣」と注する。

(7) 司馬牛：なり」と「司馬牛問仁、則曰、仁者其言也訕」は、『論語』顔淵篇第三章に「司馬牛問仁。子曰、仁者其言也訕。曰、其言也訕、斯謂之仁已乎。子曰、爲之難。言之得無訕」とあり、『集注』には「訕、忍也、難也。仁者心存而不放。故其言若有所忍而不易發。蓋其德之一端也。夫子以牛多言而躁、故告之以此。使其於此而謹之。則所以爲仁之方、不外是矣」「牛意、仁道至大、不但如夫子之所言。故夫子又告之以此。蓋心常存、故事不苟。事不苟、故其言自有不得而易者。非強閉之而不出也。楊氏曰、觀此及下章再問之語、牛之易其言可知。○程子曰、雖爲司馬牛多言故及此、然聖人之言亦止此爲是。愚謂、牛之爲人如此。若不告之以其病之所切、而泛以爲仁之大槩語之、則以彼之躁、必不能深思以去其病、而終無自以入德矣。故其告之如此。蓋聖人之言、雖有高下大小之不同、然其切於學者之身、而皆爲入德之要、則又初不異也。讀者其致思焉」と注する。

(8) 此の「底なり」據此一語、是司馬牛己分上欠闕底」とある司馬牛の人となりについては、『論語』顔淵篇第三章の『集注』に「多言而躁」とある。本条注(7)に既出(その注(7)を参照)。それを指すか。

(9) 亦た自：到らん「亦自到他顏冉地位」の「顏冉」は、顏回(子淵)と冉耕(伯牛)。「地位」は、『論語』先進篇第二章に「子曰、從我於陳蔡者、皆不及門也。德行、顏淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓。言語、宰我、子貢。政事、冉有、季路。文學、子游、子夏」とあり、顏淵と冉伯牛とを德行に長ずる者として並べ稱している。

(10) 人の臣：止まる「爲人臣、止於敬、爲人子、止於孝、爲人父、止於慈、與國外交、止於信」は、『大學章句』第三章に「詩云、穆穆文王、於緝熙敬止。爲人君、止於仁。爲人臣、止於敬。爲人子、止於孝。爲人父、止於慈。與國外交、止於信」とある。朱子は「詩、文王之篇。穆穆、深遠之意。於、歎美辭。緝、繼續也。熙、光明也。敬止、言其無不敬而安所止也。引此而言聖人之止無非至善。五者乃其目之大者也。學者於此究其精微之蘊、而又推類以盡其餘、則於天下之事、皆有以知其所止而無疑矣」と注する。

(11) 誠は物：無し」と「誠者物之終始、不誠無物」は、『中庸章句』第二十五章に見える語。「誠者自成也。而道自道也。誠者物之終始、不誠無物。是故君子誠之爲貴。誠者非自成己而已也、所以成物也。成己仁也。成物知也。性之德也。合内外之道也。故時措之宜也」とあり、朱子は「言誠者物之所以自成、而道者人之所當自行也。誠以心言、本也。道以理言、用也」、「天下之物皆實理之所爲。故

必得是理、然後有是物。所得之理既盡、則是物亦盡而無有矣。故人心一有不實、則雖有所爲、亦如無有。而君子必以誠爲貴也。蓋人之心能無不實、乃爲有以自成。而道之在我者、亦無不行矣。「誠雖所以成己、然既有以自成、則自然及物、而道亦行於彼矣。仁者體之存、知者用之發。是皆吾性之固有而無内外之殊。既得於己、則見於事者、以時措之而皆得其宜也」と注する。

(12) 孔子曰：「れん」と。「孔子曰、言忠信、行篤敬、雖蠻貊之邦行矣。言不忠信、行不篤敬、雖州里行乎哉。立則見其參於前也、在輿則見其倚於衡也、夫然後行」は、『論語』衛靈公篇第五章に「子張問曰。子曰、言忠信、行篤敬、雖蠻貊之邦行矣。言不忠信、行不篤敬、雖州里行乎哉。立則見其參於前也。在輿則見其倚於衡也。夫然後行。子張書諸紳」とあり、『集注』には「子張意在得行於外。故夫子反於身而言之。猶答子祿問達之意也。篤、厚也。蠻、南蠻。貊、北狄。二千五百家爲州」「其者、指忠信篤敬而言。參、讀如母往參焉之參。言與我相參也。衡、軛也。言其於忠信篤敬、念念不忘、隨其所在、常若有見、雖欲頃刻離之而不可得。然後一言一行自然不離於忠信篤敬、而蠻貊可行也」「紳、大帶之垂者。書之、欲其不忘也。○程子曰、學要鞭辟近裏著己而已。博學而篤志、切問而近思、言忠信、行篤敬、立則見其參於前、在輿則見其倚於衡、即是學。質美者明得盡、查滓便渾化、却與天地同體。其次惟莊敬以持養之。及其至則一也」と注する。

(13) 孟子曰：「のみ」と。「孟子曰、服堯之服、誦堯之言、行堯之行、是堯而已矣。服桀之服、誦桀之言、行桀之行、是桀而已矣」は、『孟子』告子下篇第二章の「曹交問曰、人皆可以爲堯舜。有諸」に答えた孟子の語に見える。『集注』は「言爲善爲惡皆在我而已。詳曹交之問、淺陋驕率、必其進見之時、體貌衣冠言動之間、多不循禮。故孟子告之如此兩節云」と注する。

(14) 廣「廣」は、輔廣。輔廣は本訳注(一九)の(里15・24)条に既出(その注(一)を参照)。

[里15・52 / 二七・五十二]

本文

江西學者偏要說甚自得、說甚一貫。看他意思、只是揀一箇籠籠底說話、將來籠罩、其實理會這箇道理不得。且如曾子日用間做了多少工夫、孔子亦是見他於事事物物上理會得這許多道理了、却恐未知一底道理在、遂來這裏提醒他。然曾子却是已有這本領、便能承當。今江西學者實不會有得這本領、不知是貫箇甚麼。嘗譬之、一便如一條索、那貫底物事、便如許多散

錢。須是積得這許多散錢了、却將那一條索來一串穿、這便是一貫。若陸氏之學、只是要尋這一條索、却不知道都無可得穿。且其爲說、喫緊是不肯教人讀書、只恁地摸索悟處。譬如前面有一箇關、纔跳得過這一箇關、便是了。此煞壞學者。某老矣、日月無多。方待不說破來、又恐後人錯以某之學亦與他相似。今不奈何、苦口說破。某道他斷然是異端。斷然是曲學。斷然非聖人之道。但學者稍肯低心向平實處下工夫、那病痛亦不難見。

校勘

- (1) 本条は、楠本本「子曰參乎章」には無い。
- (2) 醒―「醒」は、正中書局本は「省」に作る。
- (3) 纒―「纒」は、朝鮮整版本は「才」に作る。

訓読

江西の學者は偏(ひとへ)に甚(な)の自得を説き、甚の一貫を説かんことを要(もと)む。他の意思を見るに、只是だ一箇の僮侗底說話を揀(えら)び、將(も)ち來りて籠罩するのみにして、其の實は這箇の道理を理會し得ず。且如(たと)へば曾子の日用の間に多少の工夫を做し了はり、孔子も亦た是れ他の事事物物上に於いて這の許多の道理を理會し得了はるを見るも、却て未だ一底道理の在るを知らざるを恐れ、遂に這裏に來りて他を提醒す。然ども曾子は却(かへ)して已に這の本領有れば、便ち能く承當す。今の江西の學者は實に會て這の本領を得る有らず、知らず、是れ箇の甚麼を貫くや。嘗て之を譬ふるに、一は便ち一條の索の如く、那の貫く底(もと)の物事は、便ち許多の散錢の如し、と。須(すべ)はちく這の許多の散錢を積み得て了はるべくして、却て那の一條の索を將(も)ち

來りて一串に穿つ、這れ便是ち一貫なり。陸氏の學の若きは、只是だ這の一條の索を尋ぬるを要むるのみにして、却て都て得て穿つべきこと無きを知道らず。且つ其の説爲るや、喫緊なるは是れ肯へて人をして書を讀ましめず、只だ恁地に悟る處を摸索するのみ。譬如へば前面に一箇の關有り、纔かに這の一箇の關を跳び得て過ぐれば、便是ち了はる。此れ煞だ學者を壞る。某、老いたり、日月多きこと無し。方に說破し來らざるを待つも、又後人の錯りて某の學を以て亦た他と相ひ似たりとせんことを恐る。今は奈何ともせず、苦口して說破す。某道はん、他は斷然として是れ異端なり。斷然として是れ曲學なり。斷然として聖人の道に非ず、と。但だ學者は稍肯へて心を低くして平實の處に向かひて工夫を下さば、那の病痛も亦た見難からず。

口語訳

江西の学ぶ者はひたすら自得を説き、一貫を説こうとする。かれらの考えを見ると、ただ漠然とした話を選んで、それによつて丸め込むばかりで、実際はこの道理を理解できていない。たとえば曾子はふだんの行いに多くの修行をし、孔子もまた彼があらゆる物事において多くの道理を理解できていることを分かっていたが、まだ一の道理の在ることを知らないのを恐れて、かくてここにおいて彼を気付かせた。しかし曾子はもう已にこの技量が有つたので、承知できた。今の江西の学ぶ者は実際は少しもこの技量をもつてなく、何を貫くというのか。以前にこのことを譬えたことがある、一本の紐、あの貫く物事は、多くのばら銭のようである、と。必ずこの多くのばら銭を積んでから、その上であの一本の紐でもつてひとさしに貫く、これこそ一貫である。陸氏の学などは、ただこの一本の紐を探そうとするばかりで、かえつて全く貫けないのを知らない。その上その説というのも、大切なのは人に書を読ませようとはせず、ただ悟ることを手探

りするばかり。譬えると前方に関所があり、この関所を飛び越えられれば、それでよいとするようなものである。これは極めて学ぶ者をそこなう。それがしは年をとり、時間も多くは残っていない。論破しないでおこうとするのも、後世の人が誤ってそれがしの学問を彼と似かよっていると恐れる。今はやむを得ず、苦言を呈する。彼は断じて異端であり、断じて曲学であり、断じて聖人の道ではないと言おう。ただ学ぶ者は気持ちを静めて平易着実なところにおいて修行を積めば、あの欠点も分かりやすいはずだ。

注

(一) 江西の學者「江西學者」は、陸象山の学派を指す。陸象山は、名は九淵、字は子静、象山は号。撫州金谿(江西省)の人。一一三九—一一九二。象山の思想の特徴は、「四方上下曰宇、往古來今曰宙。宇宙便是吾心、吾心即是宇宙。千萬世之前、有聖人出焉、同此心、同此理也。千萬世之後、有聖人出焉、同此心、同此理也。東南西北海、有聖人出焉、同此心、同此理也」(『陸象山先生全集』卷二十二「雜說」)、「宇宙内事は己分内事、己分内事は宇宙内事」(同前)とあるように、心(本心)を重視するところにある。心の重視は、經書について「學苟知本、六經皆我註脚」(卷三十四「語錄」)「六經我註、我註六經」(同前)と、六經はわが心の注釈であると説く。明の王陽明は、『陸象山全集』の序文に「聖人之學心學也」と述べて象山を顕彰している。さらに象山は、朱子の「性即理」に対して「蓋心一心也、理一理也。至當歸一、精義無二。此心此理、實不容有二」(卷一「與曾宅之」)、「四端者即此心也。天之所以與我者、即此心也。人皆有是心。心皆具是理。心即理也」(卷十一「與李宰、二」)と、「心即理」の立場を主張する。朱子との学問方法の相違を象山は、江西省鉛山の鵝湖寺での会合、いわゆる鵝湖の会の際の詩「墟墓興哀宗廟欽、斯人千古不磨心。涓流積至(滴)滄溟水、拳石崇成泰華岑。易簡工夫終久大、支離事業竟浮沈。欲知自下升高處、眞僞先須辨只今」(卷二十五「鵝湖和教授兄韻」、卷三十四「語錄」)の中で、自己の学を「易簡の工夫」、朱子の学を「支離の事業」と述べている。一方、朱子は、象山の学問に対して、本条の「断然是異端。断然是曲学。断然非聖人之道」と言う以外に、「問、象山言本立而道生、多却而字。曰、聖賢言語一步是一步。近來一種議論、只是跳躑。初則兩三步做一步、甚則十數步作一步、又甚則千百步作一步。所以學之者皆顛狂」(李方子錄『語類』卷百二十四)、「子静尋常與吾人說話、會避得箇禪字。及與其徒、却只說禪」(孫自修錄、同前)などと評している。

(2) 陸氏の學「陸氏之學」は、陸氏は陸象山。陸象山とその學については、本条注(1)に既出(その注(1)を参照)。

(3) 記録者―底本は記録者を欠く。

〔里15・53／二七・五十三〕^①

本文

吾道一以貫之、譬如聚得散錢已多、將一條索來一串穿了。所謂一貫、須是聚箇散錢多、然後這索亦易得。若不積得許多錢、空有一條索、把甚麼來穿。吾儒且要去積錢。若江西學者都無一錢、只有一條索、不知把甚麼來穿。又曰、一、只是一箇道理貫了。或問、忠恕、曾子以前曾理會得否。曰、曾子於忠恕自是理會得了、便將理會得底來解聖人之意、其實借來。直卿問、一以貫之、是有至一以貫之。曰、一、只是一箇道理、不用說至一。

校勘

(1) 本条は、楠本本「子曰參乎章」には無い。

訓読

「吾が道は一以て之を貫く」は、譬如へば散錢を聚め得ること已に多くして、一條の索を將ち來りて一串に穿ち了はる。所謂一貫は、是れ箇の散錢を聚むること多きを須ちて、然る後に這の索も亦た得易し。若し許多の錢を積み得ずして、空しく一條の索有れば、甚麼を把り來りて穿つや。吾が儒は且つ去きて錢を積むを要す。江西の學者の若きは都て一錢無く、

只だ一條の索有るのみにして、知らず、甚麼を把り來りて穿つや。又曰はく、一は、只是だ一箇の道理 貫き了はる、と。或ひと問ふ、忠恕は、曾子以前に曾て理會し得るや否や、と。曰はく、曾子は忠恕に於て自是から理會し得て了はれば、便ち理會し得る底を將ち來りて聖人の意を解するも、其の實は借り來る、と。直卿問ふ、「一以て之を貫く」は、是れ至一有りて以て之を貫くや、と。曰はく、一は、只是だ一箇の道理にして、至一と説くを用ひず、と。³⁾

口語訳

「吾が道は一以て之を貫く」は、譬えるとばら錢を多く集めて、一本の紐で刺し貫いている。いわゆる一貫は、必ずこのばら錢を多く集めてこそ、初めて紐も手に入れやすい。もし錢を多く積むことができず、虚しく一本の紐が有るだけならば、何を貫くというのか。我々儒者は先ず錢を積まねばならぬ。江西の学ぶ者の場合はまったく一錢も無く、ただ一本の紐が有るだけで、何を貫くというのか。

また言われた、「一は、ただ一つの道理が貫いている」と。

ある人が質問した、「忠恕については、曾子は以前から分かっていたのですか」と。

答えて言われた、「曾子は忠恕については分かっていたので、分かっていたことで聖人の意図を理解したのだが、実際には借用したのだ」と。

直卿（黄榦）が質問した、「一以て之を貫く」は、至一が貫いているのですか」と。

答えて言われた、「一は、ただ一つの道理であって、至一と言うには及ばない」と。

注

- (1) 江西の學者―「江西學者」は、前の(里15・52)条に既出(その注(1)を参照)。
- (2) 直卿―「直卿」は、黄榦、直卿は字、号は勉齋、福州閩県(福建省)の人。一一五二―一二三二。「語録姓氏」には記録年次を記していない。朱子の高弟の一人であり、女婿でもある。また『朱子行状』の著者でもある。『宋元学案』卷六十三・『年放』第三〇頁・『門人』第二六一頁・『書院』第六七頁などを参照。
- (3) 記録者―底本は記録者を欠く。